Naturalistae 21: 111-115 (Feb. 2017) © 2017 by Okayama University of Science, PDF downloadable at http://www1.ous.ac.jp/garden/

講習会開催報告

ニール講習会のレポート

太田 謙[1]・正木智美[1]・松尾太郎[1]・西村直樹[1]

I. ニールについて

ニールとは，NEAL（Nature Experience Activity Leader：自然体験活動指導者）の略語であり，全国体験活動指導者認定委員会から認定される．全国体験活動指導者認定委員会は，青少年に対して自然体験などの体験活動を通じて健全な育成を図るべく，体験の機会と場を提供することのできる指導者を養成するための活動を行っている（http://neal.gr.jp/ 全国体験活動指導者認定委員会 自然体験活動部会 2016年11月確認）．

開催にあたり，CONE（Council for Outdoor & Nature Experience：NPO法人自然体験活動推進協議会）へ招致開催を要請し，主任講師として，菊間彰氏（愛媛県の一般社団法人 をかしや）を紹介された．自然フィールドワークセンターでは，一般にも参加者を募り，NEALの自然体験活動指導者の基礎となるNEALリーダー講習会を開催することが決定した．

NEALリーダー講習会は，2016年８月22日，23日，24日の三日間にわたって，合計18時間が行われた．受講生は岡山理科大学の学生，職員，教員を中心として，13名であった．講習会は，本学博物館学芸員課程の博物館館務実習と併催して行った．

II. 講習会の準備

2016年６月29日には，菊間講師に岡山を訪れて実習予定地を下見していただき，実施場所の確認と，講習会の内容を検討した．事前の打ち合わせの段階では，講習会の内容は岡山理科大学の近辺で行う予定であった．しかし，講習会に最も適した場所として，自然フィールドワークセンターの自然植物園の敷地内で行うこととなった．講習会では，実際に自然植物園内の森林の下草や低木を切り開いて一から活動の場所を作り出し，その場を用いて自然体験活動の企画を作る練習を行うことになった．切り開く場所は，高木層にコナラやアベマキが優占する落葉広葉樹林であり，亜高木層にカクレミノやソヨゴ，アラカシがあり，低木類にヒサカキやコバノミツバツツジ，ヤマウルシがみられ，草本層にケネザサやヤブムラサキ，ジャノヒゲなどが生育していた．

III. 講習会

講習会では最初に，菊間講師と受講生の顔合わせを行い，自己紹介を行った．そこでは，「アイスブレイク」と呼ばれる簡単なレクレーションのゲームを行い，参加者同士の緊張感を取り除き，コミュニケーションを取りやすくする工夫がなされていた．

１．実践・活動の場所を切り開く−自然体験は，まず実践−

アイスブレイクの後は，いよいよ野外に出て，自然植物園内の森林を切り開く作業を開始した（図１）．切り開く目標は，「快適に感じる森の中の広場」とした．使用する道具は，ノコギリを用いた．鉈や鎌などは，安全上の懸念があるため使用しなかった．概

１．〒700−0005 岡山県岡山市北区理大町1−1 岡山理科大学自然フィールドワークセンター Nature Fieldwork Center, Okayama University of Science, 1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama-ken 700-0005, Japan. E-mail: k_oota@edu.kake.ac.jp

図１．切り開く前の森林.

図３．森の中の広場.

図２．自然植物園内の森林を切り開く作業.

図４．講習会の様子.

ね，根元の直径が10cm以下の樹木を伐採し，ササなどを刈り取った(図２)．作業は半日にわたって行い，およそ20m×20mの範囲について，森の中の広場を作り出すことができた(図３)．

２．フィールドに潜む危険-安全管理＝安全＋管理-

野外活動を行う上で重要となる安全管理について，森林を切り払った体験をもとにして，どのような危険が存在していたか，受講生全員で検討した(図４)．フィールドに潜むリスクとしては，リスク(危険因子)とハザード(明らかな危険)の２種類に分類して整理すると，把握と対策の検討がスムーズであった．

(１)危険-リスクとハザード-

フィールドに潜む危険のうち，リスク(危険因子)は，直接は危険につながることはないが，事故の要因となりうるものである．ハザード(明らかな危険)に分類されるのは，崖地や壊れた橋など，明確な危険箇所である．

(２)リスクの細分-外的要因と内的要因-

危険のうちリスクには，外的要因と内的要因があるとの解説が行われた．受講者全員で，植物園の森林を切り払い，そこで見つけることのできたリスクは表の通りであった(表１)．

外的要因は，野外活動を行う環境に起因するリスクである．たとえば，今回講習会をおこなった森の広場であれば，切り株や石がゴロゴロして滑りやすいことにより，参加者が転ぶリスクである．また，ハチやヘビなどの出現や，雷雨・寒さなどの天候についても，外的要因にあげられる．

内的要因は，野外活動の参加者のあせりや不安，

表１．森の中の広場で検討したリスク．

外的要因	内的要因
入り口が入りづらい	エリア外に行きたくなる
切り株	木に登りたくなる
枯れ枝が落ちてくるかも	上ばかり見て歩く（足元不注意）
石がゴロゴロ	何にでも触る
かぶれる植物・棘有り植物	ツルにぶら下がる
ヘビ・ダニ・毛虫・ハチ・ムカデ	石を投げたくなる
落ち葉・枯れ枝で滑る	段差から飛び降りたくなる
廃材の釘	ハチの巣をつつきたくなる
雨が降るとぬかるむ、坂になっている	不安で動けなくなる
斜面が凸凹	棒でチャンバラしたくなる
雷	過信してしまう、油断する
森林の中は暗くなるのが早い	トイレが使えるか不安

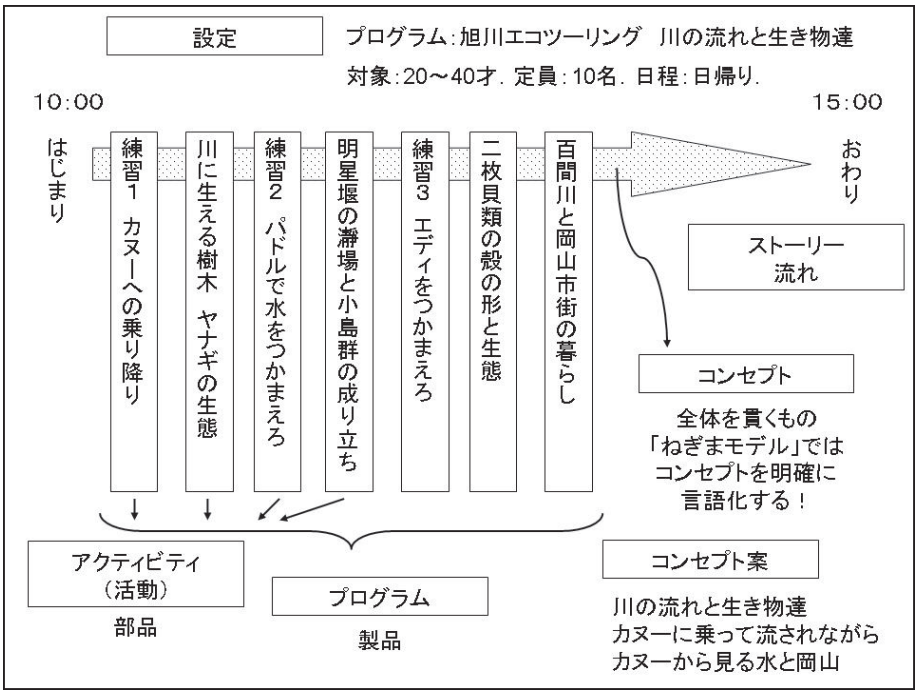

図５．ねぎまモデルによるプログラムイベント構成の例．

恐怖，関係性など，人間の心理や行動に起因するリスクである．たとえば，参加者が子供の場合は，木に登りたくなる，急に走り出す，石を投げるなどを想定することができた．他にも，エリアの外に行きたくなる，参加者同士の人間関係など，参加者の行動や心理によって発生するリスクもあることが解説された．

（３）危険への対策-適応と排除-

野外活動を行う上では，リスクマネージメント(安全管理)が重要である．リスク(危険因子)についての対策は，基本的には適応することである．外的要因に起因するリスクであれば，環境に起因するため，切り株や石がゴロゴロしていることに危険があれば，参加者に十分説明して，適応してもらうことが

重要である．同様に，ハチやヘビなどの生物は，完全に排除しようにも新たに侵入してくる可能性もある．そのため，あらかじめそれらの存在を予想し，出くわした場合の対処を考えておくことが重要である．また，雷雨・寒さなどのリスクは，服装を工夫するなどして適応することが適切な対応である．

一方，内的要因に起因するリスクは，参加者の心理によるものである．たとえば，子供が木に登ることは，子供は自制心が働かず思わず登りたくなることもあるため，完全に避けることが難しい．そのため，木登りを禁止するのではなく，安全な範囲で木登りできるように準備する方が適切である．また，参加者が感じる不安やあせりなどについても，あらかじめどのような場面で不安を感じるか予想しておくことが必要である．

講演ではハザード(明らかな危険)についての対策は，排除することであると説明された．ハザードとして，壊れた橋や崖地がある場合は，自然体験プログラムを実施する際にそもそも近づかないことが最ものぞましい．そのため，ハザードについては下見を十分に行うことによって，事前に存在するハザードを洗い出しておくことが需要である．しかし，十分に下見を行ったとしても，たとえば河川の流量などは時々刻々と変化するため，気が付かないうちにハザードに近づいている場合もあるため，注意を要する．

そして，もっとも重要なのは，野外で活動する以上，危険を全くゼロにすることはできないという点である．また，野外活動に参加する人が，危険に対する知識や対策は十分でない可能性が高い．しかし，野外の危険を危惧するあまり，野外の活動を単純に禁止してしまっては，自然に触れる機会を失うことになってしまう．そこで，リスクをコントロールできるのであれば，危険を把握した上で安全管理を行い，野外活動を行う姿勢が野外活動指導者には必要である．

３．企画のイロハ-ねぎまモデル-

講習会の後半は，プログラムイベント(企画)を班ごとに考えた．プログラムイベントの構成の設計は，はじまりとおわりの時間の中にストーリー(流れ)があり，アクティビティ(活動)をコンセプト(全体を貫く概念)が貫きプログラム(製品)を成す構造となっている(図５)．

(１)企画の構成要素

今回の講習会で学んだプログラムイベントの組み立て方に基づき，試行を行っている旭川カヌーエコツアー(太田ほか 2015，太田ほか 2016)の内容を企画した(図５)．

まず，プログラムイベントに用いる用語を個々に説明する．プログラムイベントを構成する最小単位がアクティビティである．アクティビティは，たとえばカヌーの基礎練習や，ヤナギの生態の観察などに該当する．そのため，製品全体からみれば部品に相当する部分である．

プログラムは，部品であるアクティビティを束ねた一連の活動である．そのため，今回の例では「カヌーによる岡山旭川エコツアー」に該当し，参加者に提供する製品のそのものとなる．

そして，コンセプトはプログラムイベントの，全体を貫く基本的な主題である．今回の例では「川の流れと生き物たち」が該当する．コンセプトは，必ずしも参加者に見えるように設定する必要は無いが，明確に言語化することが極めて重要である．

(２)“ねぎまモデル”によるプログラムイベントの企画

今回の講習会を通して，プログラムイベントを企画する際には，コンセプトが全体を貫くことの重要性を学んだ．図５にあるように，コンセプトは複数あるアクティビティを貫いたうえでストーリーを形成する必要がある．コンセプトにアクティビティが貫かれていないと，全体として出来上がるストーリーが見えにくくなり，プログラムイベントそのものが成立しなくなる．

そのため，良いプログラムイベントを作るポイントは，参加者を惹きつけるコンセプトを見出し，良

質なアクティビティをコンセプトで貫き，全体のストーリーを作ることであろう．

菊間講師は，コンセプトがアクティビティを貫くプログラムイベントの構造を，焼き鳥の“ねぎま”にたとえて，“ねぎまモデル”とよんでいた．“ねぎま”とは，串に鶏肉とネギを差して焼いたものである．企画の考え方を表すモデルの名称として，明確でありながらユニークな名称である．

IV．まとめ

講習会では，野外において自然活動を指導する時の基本的な知識を得ることができた．今後は，今回の講習会で学んだ自然体験活動の企画の手法を自身の知識に定着させるべく，実際のイベントの企画を行っていく必要があるだろう．

謝辞

講習会で講師を務めていただいた一般社団法人 をかしやの菊間彰講師に感謝いたします．

引用文献

太田　謙・正木智美・松尾太郎(2015)．カヌーによる旭川エコツアー –水の上から川を見ると，いつもと違ったものが見えてくる–．*Naturalistae* 19：75–78.

太田 謙・正木智美・松尾太郎・西村直樹(2016)．カヌーによる旭川エコツアー –水の流れと生き物たち–．*Naturalistae* 20：103–107.

(2017年１月６日受理)